

保育者養成校における表現活動の取り組み ～絵本『100かいだてのいえ』を題材とした授業実践～

加藤 友彦*・増原 真緒*・長島 佳奈*

2026年2月18日受理

1. はじめに

保育・幼児教育における表現活動は、造形表現、音楽表現、言語表現、身体表現、4つの表現を一体として取り扱い、結果としての作品等よりも、表現のプロセスを重要視している。多くの保育者養成校では、複数の表現の融合した授業を展開している。本研究は、2024年7月より12月までのおよそ半年間にわたり取り組んだ、総合的な表現活動による学生の学習成果について報告するものである。

1-1 研究背景

大阪健康福祉短期大学保育・幼児教育学科（以下、本学科とする）は、開設年次より、独自科目として「総合表現」を開講してきた。表現系科目の集大成として、2年次に音楽表現、造形表現、言語表現、身体表現を総合した表現を構想および製作し、発表してきた。本学科の「総合表現」の2019年度から2023年度までの取り組みを表1の通り記す。

表1 これまでの「総合表現」における取り組み

年度	会場	内容
2019年度	本学科 (第2講義棟多目的室)	音楽表現を取り入れた劇発表を行った。言語表現としてシナリオを作成し、造形表現として舞台美術を製作した。1年生も室内装飾やダンスで参加した。
2020年度	本学科 (第2講義棟多目的室)	音楽表現を取り入れたペープサート劇を行った。新型コロナ禍により、無観客の学内発表とした。
2021年度	島根県民会館・中ホール	音楽表現を取り入れた劇発表。1年次に「児童文化」で製作した紙芝居をもとに、1年生の発表（「児童文化」）も同時に行った。
2022年度	本学科 (第2講義棟多目的室、学生休憩室、第2講義室、管理棟演習室)	幼児を対象とした「遊び場」を構想および製作し、発表した。1年生は来場者として参加した。
2023年度	本学科 (第1講義棟第1講義室、第2講義棟多目的室、第2講義室)	クリスマス为主题に、幼児を対象とした「遊び場」とコンサートを構想および製作し、発表した。造形表現として第2講義棟階段壁面に装飾をした。

1-2 「総合表現」の課題とその克服

「総合表現」には、いくつかの課題があった。

2022年度までは、発表会場、内容は一定しなかった。新型コロナ禍による発表方法の制約と、担当教員を固定化することのできなかったことが原因である。舞台発表をともなう授業では、発表場所の確保は欠かせない。本学科に舞台設備はなく、最も広い空間である多目的室を発表場所としてきた（2019年度、2020年度）。2021年度には学外で発表をしたものの、準備に費やす時間や費用の面から継続して実施することは困難であることが分かった。また、新型コロナ禍の影響等で、不特定多数の観客を動員することのリスクもあり、2022年度より、大学内で発表することとなった。コンサートを中心とした音楽表現は多目的室、その他の発表は各教室などを活用することとなった。また、2023年度より、本稿筆者の3名による指導体制が確立した。

次に、「総合表現」の課題のひとつは活動時間の制約であった。独自科目とはいえ、就職活動や卒業研究などと重なる2年次後半に「総合表現」だけに時間を費やすことはできない。そこで、2年次前半の「表現技術Ⅲ」を「総合表現」の準備段階と位置付けた。2023年はパネルシアターの製作を行い、演目のひとつを「総合表現」のコンサートにアレンジすることで発表に至った。2024年度は、当初より「総合表現」の準備に充てることとした。

そして、「テーマ」設定も課題であった。「総合表現」の発表は、カリキュラムの都合上、12月上旬とせざるを得ない。クリスマス・シーズンと重なり、同様な趣向に陥りがちとなる（2019年度、2022年度、2023年度）。学生の学びとしては多様な選択肢のある方がより効果的と考え、本稿で述べる2024年度からは「絵本の世界」をテーマとした。学生に親しみがあり、な

*大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

おかつ、様々な表現活動を展開しやすい絵本作品を複数、学生に提示した。学生の意思で、絵本『100かいだてのいえ』をモチーフとして表現活動を構想し発表することとなった。

1-3 『100かいだてのいえ』

「総合表現」の題材とした絵本『100かいだてのいえ』は、いわいとしおのつくった絵本である。

1-3-1 作者・いわいとしおの略歴と「100かいだてのいえ」シリーズ

いわい（本名・岩井俊雄）は1962年、愛知県に生まれる。筑波大学大学院芸術研究科デザイン専攻総合造形コースを修了し、メディアアーティストとして活動する。『100かいだてのいえ』（2008、偕成社）は、いわいの絵本作品第1作である。自作絵本第1作でもある。以降、「100かいだて」シリーズはとして第2作から第6作まで刊行されている（2025年現在）。2000年代に発行された絵本の中では人気の絵本作品群となっている²⁾。

1-3-2 ストーリー

物語は、主人公「トチくん」のもとに差出人不明の手紙の届いたところから始まる。トチくんは「100かいだてのいえ」にたどりつき、階段を上り、100階建ての家に住んでいる10種類の動物（1階から順に、ネズミ、リス、カエル、テントウムシ、ヘビ、ミツバチ、キツツキ、コウモリ、カタツムリ、クモが10階ずつ暮らしている）と出会う。一番上の100階で手紙の差出人と会い、手紙の届いた理由が明かされる³⁾。

1-3-3 テーマ

『100かいだてのいえ』のテーマは「数」である。当時、小学生になったいわいの娘が数字を覚えられなくて悩んでいたことをきっかけにつくられた。10進法にもとづく数の仕組みを、絵本でどのように表現するかを検討した結果、いわいは建物に着目した。建物は1階、2階、3階と数の増加に比例して高さが高くなるため、数字を視覚化することに適していると気付いたのである⁴⁾。

1-3-4 絵本表現の工夫

『100かいだてのいえ』には表現の特徴と様々な工夫

がある。

和田（2018）は、『100かいだてのいえ』の視覚表現の特徴として、「積層」と「断面」の2つを指摘している。「100かいだてのいえ」は、1階から100階までの小部屋が積み重なり、「積層」によって一つの構造体を構成している。この100に及ぶ小部屋を積み木のように積み上げることで異次元の世界を創造し、読者は主人公とともに下から上に向かう冒険の旅をするのである。さらに各階ごとに小部屋のデザインを変えている。1～10階の小部屋の断面が矩形であるのに対し、丸みを帯びた形（31～40階）、波形（41～50階）、逆三角形（61～70階）、六角形（71～80階）、円形・螺旋形（81～90階）へと変化する。これらの形は、それぞれの部屋に住む動物と密接な関係がある。本来見えないものを、断面で表すことで可視化し、読者の想像力を刺激しているとしている⁵⁾。

上記以外に、縦開きの構造、登場する動物の擬人化とマンガ的・アニメ的な表現、アナログとデジタルの融合、計算しつくされた配色、ページターナとテキスト・レイアウトの工夫などがある⁶⁾。

2. 研究方法

2-1 対象科目、対象者、時期

本研究では保育士資格必修科目である「表現技術Ⅲ」および幼稚園教諭免許必修科目である「総合表現」を対象とした。本学科で入学直後より順に開講される「表現技術Ⅰ」および「表現技術Ⅱ」を踏まえ、前述のように表現活動としての集大成として連続的に開講する科目である。

対象者は、大阪健康福祉短期大学保育・幼児教育学科第6期生の中で、「表現技術Ⅲ」および「総合表現」の受講者42名である。

「表現技術Ⅲ」の開講時期は2025年7月～10月、「総合表現」の開講時期は10月～12月となっていた。

2-2 研究方法と分析の手順

2-2-1 研究手続き

当該科目の授業は筆者3名体制で担当した。「表現技術Ⅲ」の授業開始時に、本取り組みについて実践研究として執筆したい旨を明確に説明し、取り組み姿勢から発表当日、振り返りに至るまでの様子を研究としてまとめることについて学生の合意を得た。ただし、写真掲載の際の写り込みについては承諾を得ていない

ことから、学生の倫理を遵守するため、人物の写る写真は掲載しないこととする。

2-2-2 分析対象と方法

分析対象は、準備期間から発表当日までの学生の取り組み実態、成長や学びの姿勢とした。あわせて学生の学びを明確にするため、授業全回終了後に記述・提出を求めた振り返りシート（自由記述）より該当する記述について抜粋し、ナラティブ分析を行った。

なお、振り返りシートの項目は「保育・幼児教育における表現の意義」と幅広く検討可能な主題とした。学生の担当した内容をもとに自身の経験を振り返り自由に考察できるようにした。

3. 2024年度の活動

2024年度は「表現技術Ⅲ」と「総合表現」を一体として取り組んだ。先に、「表現技術Ⅲ」での取り組みを述べ、続いて「総合表現」の取り組みを述べる。

3-1 「表現技術Ⅲ」

3-1-3 絵本選書の過程

前述の、絵本の世界観を具現化する取り組みは本年度が初めてである。指導・助言をする立場として適切な絵本を授業担当者である筆者（以降、「筆者」とする）ら3名で検討した。その結果、「表現技術Ⅲ」の初回に、『ぐりとぐら』、『からすのパンやさん』、『100かいだてのいえ』の3冊の絵本を学生に提示した。選書の理由は、筆者（増原）の現場保育者経験より、物語性がある世界観を具現化しやすく、かつ複数のコーナーで多様な形に活動を展開することが可能な絵本だと考えたためである。

3冊の絵本を学生に提示した上で、以下のように検討し、決定した。

- ①学生同士で話し合い、選んだ理由とともに意見を発表し、その意見を全体で共有した。
- ②他者の意見を聞き、気づきや発見を通して、さらにイメージを膨らませ、どの絵本ならば自分たちで表現可能かを再度話し合った。
- ③学生の話し合いにより、題材を絵本『100かいだてのいえ』に決定した。

3-1-2 絵本の世界の具体化

『100かいだてのいえ』の選書後、学生たちはグループを組み、活動案を検討し、その理由とともに発表した。黒板を埋め尽くすほど多様な提案となり、絵本の世界を多角的に広げようとする姿勢があった。その後、来場者、特に子どもの楽しめることを重視し、実現可能な案を絞り込んだ結果、以下の4つを選んだ。

- ①洋服づくりを通して絵本の登場者になりきるコーナー。
- ②手作り楽器を製作するコーナー。
- ③迷路コーナー。スタンプラリーや宝探しの要素を含み、ヘビのトンネルやプラネタリウム、コウモリの部屋、壁面への落がきを組み込む。
- ④ダンスや歌、合奏などを取り入れたコンサート。

以上の決定を踏まえ、およそ2週間後から「総合表現」に取り組んだ。

3-2 「総合表現」

3-2-1 シラバス

「総合表現」は筆者3名で活動の指導をした。シラバス掲載の授業の目的・ねらい、授業全体の内容の概要、授業終了時の達成課題（到達目標）は表2の通りである。

表2 「総合表現」シラバスに掲載した授業概要等

授業の目的・ねらい	子どもの豊かな心を育むために、絵本の世界をテーマに「表現技術Ⅲ」の計画を踏まえ、総合的な活動の製作あるいは制作をする。地域の子どもの招待して発表し、発表後には振り返りをし、活動全体を通して、保育・幼児教育における表現の意義を考察する。
授業全体の内容の概要	絵本『100かいだてのいえ』をテーマに製作・制作と準備をし、地域の子どものに向けて発表する。発表後は片付け、鑑賞、振り返りを行う。
授業終了時の達成課題（到達目標）	テーマにもとづいた、子どもの発達や興味・関心に応じた総合的な活動を製作あるいは制作、発表、鑑賞、振り返りを通して、子どもの表現活動を理解し、表し方や伝え方を習得し、学びを省察する力をつける。

3-2-2 活動の実際

2024年10月25日より12月18日まで、およそ2ヶ月間、表3の流れで活動した。

表3 授業の流れおよび内容

回, 日時等	活動
第1～8回 10月25日 ～12月6日	各コーナーに分かれ、活動の準備をした。第6回・第7回(11月29日・1限, 2限)ではリハーサルと修正を行った。
第9回 12月13日	前日準備として、各コーナーの設営をし、学内装飾をした。コンサート・コーナーの学生は、前日リハーサルをした。授業時間外でも準備をした。
第10回 12月14日(1限)	当日準備をし、来場者に備えた。
第11回 12月14日(2限)	各コーナーで発表をした。
第12回 12月14日(3限)	学生同士で各コーナーを訪問した。
第13回 12月14日(4限)	片付けをし、原状復帰をした。
第14回 12月18日(3限)	発表の様子を撮影した動画を鑑賞した。
第15回 12月18日(4限)	活動の振り返りをした。個人の振り返り、各コーナーの振り返り、全体での振り返りをした。

4. 各コーナーの取り組み

前述のように、「総合表現」は3つのコーナーとコンサートで実施することとなった。以下に、各コーナーの取り組みについて、学生の様子と発表当日の様子を述べる。あわせて、学内装飾についても述べる。

4-1 製作体験コーナーの取り組み

4-1-1 手作り楽器コーナー・学生の様子

手作り楽器のコーナーを担当するグループでは、子どもたちが楽しみながら製作できる楽器について検討し、カスタネット、太鼓、マラカスの3種類を製作できるコーナーを設けることとなった。カスタネットは、紙皿とペットボトルのキャップを用いて作ることにし、試作を通してキャップの取り付け位置を工夫した。装飾には既製のシールや画用紙を用意し、子どもが自由に貼れるようにした。太鼓は、首から紐を下げ叩ける太鼓を想定し、空き缶や紙皿、プラスチック容器など複数の素材を用いて試作をした。音の響きや扱いやすさを確認しながら、安全性と音の出やすさを踏まえ、直径13cmで深さのある紙皿を2枚重ねて胴とすることとした。

マラカスは、カプセルトイの容器に柄を組み合わせ、マイクのような形の楽器を製作することとした。カプセルの中に入れる素材により音の変化することに着目し、1cm程度に切ったストローや大きさの異なるビーズを用意した。学生は、子ども自身で音の違いを確かめながら素材を選べるようにすることで、音を探

究する活動につながることを意図した。柄は、当初トイレットペーパーの芯を用いて試作していた。しかし、子どもが持つには大きかったり、握ると潰れてしまったりすることが分かった。そこで、筆者(長島)は、子どもの手の力や扱い方を踏まえる必要性を指摘し、段ボールを巻いて強度を高めた筒に変更するよう助言した。

4-1-2 手作り楽器コーナー・当日の様子

発表当日、学生たちは子どもたちのそばに寄り添い、カスタネットや太鼓の飾りつけを見守った。また、必要に応じて、ペットボトルキャップを貼り付ける作業を手伝った。太鼓については、小さな穴に紐を通す作業は子どもには難しいことが分かり、学生が代わって担当した。完成した楽器を手にした子どもたちは嬉しそうに音を鳴らしていた。学生は子どもの「できた」という達成感を味わえるよう、無理のない範囲で関わることを意識していた。

マラカスは、製作の難しい乳児に対しては、学生が完成品を用意して手渡した。保護者が鳴らしてみると、次第に乳児自身が握って振っていた。乳児は、新鮮なものに出会ったかのようなまなざしで音に親しんでいた。一方、製作のできる子どもたちは、カプセルトイの容器の中に入れるビーズやストローの量を調整し、様々な色の容器や柄の中から自分の好みに合ったものを選んでいった。

4-1-3 衣装製作コーナー・学生の様子

衣装製作コーナーは6名の学生が担当した。まずはどういったコーナーにすると来場者(子ども)の期待感や充実感が高まるかを話し合った。その結果、子どもが『100かいたてのいえ』に登場する生き物になると喜ぶのではないかという結論に至った。本作品の中では10階ごとに住む生き物が異なり、全9種の生き物が登場する。その中で衣装として具現化しやすいものを検討し、「ネズミ」、「リス」、「カエル」、「テントウムシ」の4種類に決定した。次に、絵本の世界観を壊すことなく楽しむことのできる衣装デザインを検討した。身体部分は頭と腕を通す穴を開けたポンチョ風の衣装に決定し、素材は保育現場で衣装作りによく用いられるカラービニール袋とした。併せて、頭部に触角や耳のある生き物の多いことから、画用紙と平ゴムでカチューシャの飾りを事前に用意することとした。ど

の生き物の衣装を製作するかは子ども自身が選択できるようにした。

製作は、ポンチョ担当とカチューシャ担当に別れて取り組んだ。ポンチョには首回りの広さや丈、尻尾の有無について、カチューシャは頭部周囲の大きさやホチキス留めの安全性、量産するための効率的な方法等について教材研究をした。筆者（増原）より、保育現場での事例や見本の提示などの助言を受けて取り組んだ。

来場者50名の想定で準備を進め、計画的に取り組む、本番当日までに完成させることができた。

4-1-4 衣装製作コーナー・当日の様子

発表当日、学生は来場者に個別に関わり、衣装製作に取り組んだ。小学生もいたため、即席で大きなカラービニール袋を活用し、臨機応変な対応もできた。絵本に登場する生き物になりきった子どもたちは学舎を満足気な表情で歩いており、衣装を身に付けたことを喜んでいる様子が窺えた。

一方、課題は、子どもによってポンチョの首回りが大きかったり、逆にカチューシャが小さかったりしたことである。事前に子どもの身体のサイズを調べた上で準備し、想定外の対応を考えておくことが必要であった。

4-2 参加体験コーナーと学内装飾の取り組み

4-2-1 参加体験コーナーの活動

参加体験コーナーは、前述のように、学生の話し合いの中で「迷路」をつくと決まっていた。迷路は、絵本『100かいだてのいえ』の登場者にちなんで4つのパートで構成した。入口から順に「ヘビの道」、「コウモリの部屋」、「カタツムリの部屋」、「クモの部屋」である。会場を十字に4つに分け、それぞれのパートをつなぐパス（小径）をつくった。また、各パートを通過するたびに、スタンプをもらう仕掛け（スタンプラリー）も用意した。筆者（加藤）の指導にあたっては、学生の主体性、自主性を尊重し、材料の調達や材料に応じた加工方法の助言に留めた。以下に学生の取り組みの様子を記す。

4-2-2 「ヘビの道」

絵本の40階から49階に登場するヘビをイメージし、迷路の道を製作した。ヘビのように這って進むことのできる迷路とするため、スズランテープですだれ状

のゲートをつくり、卵の容器を用いた凸凹道やエアキャップを敷いたエリアをつくるなどして、全身で楽しむことのできる工夫をしていた。〈図①〉参照

4-2-3 「コウモリの部屋」

絵本の70階から79階に登場するコウモリをイメージし、暗闇の部屋を製作した。ダンボールで囲った部屋の上部を、黒ビニール袋を貼り合わせてつくったシートで覆い、暗い空間とした。部屋の中には風船を入れ、換気用の送風機を用いて風船を動かす工夫を考えた。〈図②〉参照

4-2-4 「カタツムリの部屋」

絵本の80階から89階に登場するカタツムリをイメージし、その中で「100かいだて」シリーズの絵本をよむことのできる部屋を製作した。部屋の中には絵本よみ用のダンボールとフェルトで製作した机と椅子を置いた。小部屋の壁にはカタツムリの殻をモチーフとしたステンドグラス風の装飾をカラーセロハンでつくった。製作を進める中で、ダンボールの色では効果はないと考え、部屋の内外を彩色した。〈図③〉参照

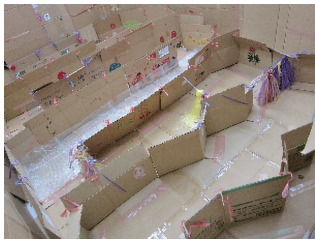
4-2-5 「クモの部屋」

絵本の90階から100階に登場するクモをイメージし、蜘蛛の巣を張り巡らせた部屋を製作した。ダンボールで囲った部屋に、白い毛糸を張り巡らせた迷路とした。床から立ち上がるダンボールの壁は不安定である。その壁に毛糸をつけて張るとダンボールの壁が倒れる危険性がある。毛糸のテンションと壁構造の安定を図ることに苦心し、試行錯誤の末、安定した構造に至った。〈図④〉参照

4-2-6 参加体験コーナーの取り組みのまとめ

「表現技術Ⅲ」で構想をたてていたものの、約2カ月弱の準備期間で「迷路」をつくり、発表することができた。限られた時間と予算の中、収集した廃材や安価な材料を用いて製作することができた。これは、保育現場には潤沢な予算のないことを想定しているからである。「迷路」は見た目のよさよりも、その中で子どもがどれだけ楽しめるのか、アイデアを出し合ってつくり上げる学生の姿があった。立体的に構築しなければならないため、構造上の強度を担保することが重要であり、遊びの空間としての安全性にも苦慮してい

た。試行錯誤しながら最適解を見つけたところに学びがあったと考えられる。



〈図①〉



〈図②〉



〈図③〉



〈図④〉

4-3 学内の装飾

各コーナーの活動と並行して、学内に装飾を施した。装飾の造形物等は、「表現技術Ⅲ」の授業時にあらかじめ製作し、発表前日に学内の装飾を行った。第1講義棟階段壁面には、絵本の登場者をモチーフとした装飾をした。〈図⑤〉〈図⑥〉参照

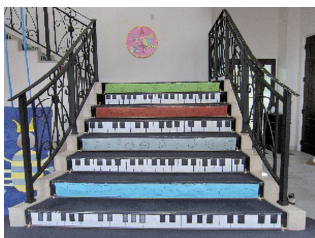
第2講義棟階段にはピアノの鍵盤をモチーフとした装飾をし、登場者をモチーフとした顔出しパネルを製作し吊り下げた。〈図⑦〉〈図⑧〉参照



〈図⑤〉



〈図⑥〉



〈図⑦〉



〈図⑧〉

5. コンサートの取り組み

コンサート・グループは、以下の発表をすることになった。

- ・絵本『100かいだてのいえ』の読み聞かせ。『100かいだてのいえ』の大型絵本を用意し、音や音楽をつけて物語の世界を広げる。
- ・『むしむしフェスティバル』^{注1}のダンス。
- ・パネルシアター『にじ』^{注2}。歌を取り入れたパネルシアターを自作する。
- ・『にじのむこうに』^{注3}の合奏。

5-1 音楽的表現

『100かいだてのいえ』を題材にした音・音楽づくりの取り組みについて述べる。

5-1-1 音・音楽づくり

音・音楽づくりにあたり学生からは、電子キーボードの音色や生の楽器の音を組み合わせたり、子どもたちの知っている童謡を取り入れたいとの意見が出た。カエルの登場場面では『かえるのうた』、ミツバチの登場場面では『ぶんぶんぶん』、カタツムリの登場場面では『かたつむり』を演奏することとした。子どもたちの「知ってる」という反応を引き出し、物語への興味を高めたいという学生の意図によるものである。

一方、ネズミ、リス、テントウムシ、ヘビ、キツキ、コウモリ、クモの登場場面では該当する童謡はなかったため、自分たちで音や音楽を創作することになった。音・音楽づくりは絵本の読み手を含む学生4名ですすめた。この活動では、電子キーボードのYAMAHA PSR-SX600を使用した。この機種は1,360種類に及ぶ多彩な音色を備えており、場面に応じた音楽表現を検討するうえで有用であると考えた。

5-1-2 リスの登場場面

リスの登場場面では、「可愛らしい雰囲気」を表現するため、木琴、カリンバ、ミュージックボックスなどの軽やかな響きをもつ音色を選択した。鍵盤の高低を遊び弾きしながら音を模索し、音色や音域の方向性を定めた。右手による旋律づくりは難航し、筆者（長島）の助言を踏まえ、8分音符や16分音符を織り交ぜた旋律が構成された。一方、左手による伴奏づくりは、子どもの歌のピアノ実技やコード理論の学習を基盤として、C-F-G-C（I度-IⅣ度-IⅤ度-I度）の和音進行を用いて試みた。このような経過で、リスの登場場面の音楽としてまとめられた（譜例1）。

5-1-3 テントウムシの登場場面

テントウムシの登場場面では、リスの登場場面よりも低い音域を中心に試行的に演奏していた。「ポンポンしたイメージ」は共有されていたものの、実際に様々な音色を試してみても、イメージに合う音楽表現には至らなかった。そのような中で、学生の一人がC、F、Gなどの主要三和音を鳴らし始めた。しかし、リスの場面で用いられた主要三和音(C、G)と4拍子の枠組みから抜け出すことができず、音の響きの変化に乏しかった。そこで筆者(長島)より、学生が幼稚園実習において伴奏経験のある、「だからあめふり」^{註4}の3拍子のリズム感を参考にしよう助言した。その結果、CとGm7を交互に用いる進行を取り入れ、場面の変化を意識づけた音楽表現へとまとめられた(譜例2)。

5-1-4 ヘビ、クモ、コウモリの登場場面

ヘビの登場場面では、スライドホイッスルや電子キーボードのオーボエ、ファゴット音色を用いて音づくりをした。筆者(長島)よりマカーム・ヒジャーズ

カル(C・D \flat ・E・F・A \flat ・B)を提示されたことで、特徴的な旋律が創作され(譜例3)、ギロやスライドホイッスルも効果音的に用いられた。

そして、クモの登場場面では、シロフォンやビブラフォン、ジャズギターを組み合わせ、半音階を取り入れた旋律が生み出された(譜例4)。キツツキの場面では旋律を設けず、ウッドブロックとクラベスによる即興的なリズム表現とし、コウモリの場面ではコントラバスの音色によるハ短調の音階が用いられた。

以上のように、学生らは場面のイメージに沿って試行錯誤を重ね、音色や旋律の選択に主体的に取り組んだ。活動を通して、物語を音や音楽で表現するには、音域や音色、リズム、旋法といった多様な要素が相互に関係し合うことを体験的に理解する機会となったと考える。

5-2 言語・身体的表現

言語・身体表現として指導・助言が必要となったのは主に大型絵本読みおよびパネルシアター演出、原曲の振り付けを幼児向けに簡易化した体操であった。

譜例1 リスの登場場面の音楽



譜例2 テントウムシの登場場面の音楽



譜例3 ヘビの登場場面の音楽



譜例4 クモの登場場面の音楽



5-2-1 大型絵本の言語・身体的表現

大型絵本は、学生2名が絵本の左右に立ち、他学生の演奏や効果音と関連させながら読み進めることとなった。学生には声の大きさ、読む速さ、読み語りの調子、視線の向け方、問の取り方、ページのめくり方等の課題があった。そこで、個別練習の時間を複数回設け、筆者（増原）自身が手本を示し、子どもとの対話的絵本共有を十分に楽しむことのできる読み方を考え、習得できるようにした。また、練習の終盤では子ども役となった筆者（増原）が目前に座り、子どもらしい発話をするを通して実際場面を想定した読み方を意識できるようになった。練習を重ねるにつれ、学生は次第に目前の子どもを意識した読み方を身に付けていった。

5-2-2 パネルシアターの言語・身体的表現

パネルシアターにおける言語表現は、「にじ」の歌に合わせて製作した絵人形で演じながら歌うこととなった。絵人形は「男の子」、「シャベル」、「洗濯物」、「雲」、「太陽」、「虹」であり、1名の学生が「男の子」を演じ、2名の学生がその他の絵人形を動かした。当初は絵人形の動かし方や出し入れするタイミング、パネルの貼り位置に課題があり、演者である学生の表情にも硬さが見られた。筆者（増原）は、観客となる子どもの視線の高さから観察して助言し、時に見本を示した。また、演じる合間に表情を意識できるよう身振りで示すことで、学生自身が自分の表情が硬くなっていることを意識できるようにした。練習を重ねるにつれ、絵人形の出し入れやタイミングは曲の物語性の感じられる動きとなり、動かし方も改善された。

5-2-3 「むしむしフェスティバル」の体操

体操は、「むしむしフェスティバル」の曲に合わせて学生4名が前に出て体操することとなった。当初はテレビ番組の動画を見て、映像と同様の振り付けをしていた。ところが、音源と合わせてみるとテンポが速いことが分かり、子どもと一緒に身体を動かすには難しさがあることが分かった。そこで、曲に対して倍速の振り付けとし、「(何となく)この歌を知っている・見たことがある」という子どもたちが模倣して楽しむことができるように変更した。併せて発話的参加もできるよう、体操前にシルエットクイズも取り入れ、ヒントを与えながら対話的に楽しむことのできる形を目

指した。

5-3 発表

コンサート本番では、いずれの演目においても、学生たちは終始真摯な姿勢で演奏に取り組んでいた。

5-3-1 大型絵本『100かいだてのいえ』の音楽表現

大型絵本『100かいだてのいえ』の音楽を担当した電子キーボードおよび打楽器の学生3名は、ページをめくるごとに登場する動物の雰囲気に応じて、電子キーボードのタッチやアーティキュレーションを変化させ、音楽的な工夫をしていた。また、打楽器演奏においては、子どもたちから見えやすい位置や身体の動きを意識しながら演奏し、これまでの練習の成果を十分に発揮していた。さらに、絵本の読み手と繰り返し練習を重ねてきたことにより、語りのタイミングに即した演奏となり、物語と音楽の一体となった表現に至った。スライドホイッスルやウッドブロックといった既存の楽器も効果的に用いられ、物語の世界観と自然に溶け合っていた。

5-3-2 パネルシアター『にじ』および合奏『にじのむこうに』の音楽表現

パネルシアター『にじ』では、伴奏のテンポが過度に遅くなったり、歌全体の雰囲気が必要以上にしんみりとしたりしないよう事前に指導を行った。伴奏者はテンポの安定だけでなく、音色や弾き方にも配慮し、明るい雰囲気でも演奏した。歌唱の学生たちは楽曲のもつ明るさを大切に、のびやかな表現をしていた。

さらに、合奏『にじのむこうに』では、学生がそれぞれの役割を意識しながら演奏を支え合い、楽曲のもつ高揚感を会場全体に広げることができた。

発表当日は、子どもたちが音の変化に反応して身を乗り出したり、知っている歌の場面で声を合わせたりしていた。

5-3-3 大型絵本『100かいだてのいえ』の言語・身体的表現

大型絵本は練習時には居なかった子どもが目前にいて、意識的に子どもの方に目を向けながら読むことができ、台詞の表現等も練習の成果が十分に活かされていた。ただし当日ならではの緊張感もあり、子どもの方には目を向けるものの対話的あるいは

応答的関わりと言うには課題が残った。

5-3-4 パネルシアター『にじ』の言語・身体的表現

当初の予定通り、当日のイベント開催時刻より1時間程遅らせて開演したため、それまでのところは細かな動きの確認やリハーサルを行って本番を迎えた。

パネルシアターの言語表現では、コンサートメンバーの学生全員で歌を歌ったため会場が賑やかで明るい雰囲気に包まれ、絵人形担当の学生も絵人形の動かし方や出し引きするタイミングを心得て表現することができていた。男の子の絵人形の動かし方については、実際に子どもがいない状況での練習を重ねていたため、イメージを掴めきれていない側面も見られたものの、子どもに目を向けようとする意識が感じられた。

5-3-5 「むしむしフェスティバル」の体操の言語・身体的表現

体操では、まずはクイズをすることで子どもたちと

応答的にやりとりし、子ども参加型の雰囲気を作り出すことができた。練習の成果により前に立つ4名の学生の動きは揃っており、満面の笑みで行う様子から子どもたちの期待感が高まった。一斉にジャンプする前に掛け声をかける担当の学生が当日は緊張感の高まりからそのタイミングを間違えたものの、他学生がそれをフォローするように正しいタイミングで、皆で合わせてジャンプするような誘い掛けを行った様子が印象的であった。

6. 振り返りレポートに見る学生の学び

以下に、振り返りレポートの記述より、学生の学びを考察する。学生の記述内容からありのままの表現でより多くの文章を抜粋するため、省略部分を「…」で示すこととする。

6-1 手づくり楽器コーナー

手づくり楽器コーナーを担当した学生の中から代表して4名を取り上げ、まとめたものが表4である。

表4 手作り楽器コーナー担当学生の振り返り

学生1：本番間近で修正箇所が発覚したり、当日ハサミの数が足りず準備が欠けていたことに気付いたりなど、見通しが足りず上手くいかないことがありました。このことから、「もし○○だったらどうだろう」と考えを巡らせ、失敗した場合も想像し、もしその失敗が起こった時にうまく対応できるような見通しを持った準備が必要だった①と気付かされました。……3つの楽器コーナーがあったため、子どもの人数が少ない時に生徒全員で子どもを見守ることがありました③。
学生2：マラカスの持ち手をトイレトペーパーの芯を使おうと話していましたが、先生から「子どもの手では大きすぎる」と助言をいただきました。……私たちは自分の手の大きさでしか考えておらず、子どもに対しての配慮や身体的な部分を理解してどういった物を使うのかということを考えていなかったため……子どもの目線に立ったり、子どもの気持ちになって考えたりすることが大切だと学んだ②。
学生3：グループ内でのやり取りがうまくできてなく、必要な物品を購入していたかと思いきや購入しておらず、前日に買い出しに行ったりなど、うまくいかないこともたくさんありました①。……初めの話し合いの時は、意見が出ず話し合いが中々進みませんでした。……自分が担当した製作物を作り終えた後は作り終わっていない人の製作物の手伝いをしたりと協力しながら製作することができました③
学生4：事前準備を行っておくことで、足りないものを事前に把握することができたり、当日のシュミレーションを行うことで、万が一当日トラブルがあっても冷静に対応できるのではないかと思った。今回も、実際に事前準備をしてみると足りないものが出てきたり、必要なものがでてきた。このことから、事前準備の大切さを学んだ①。……楽器づくりで使用したシールが、世界観と少し違うようなデザインもあったので、世界観を大切にすることの大切さを学んだ②。各ブースで協力し、子どもたちが楽しむことができるようにそれぞれが役割を持ち、協力し取り組むことができた。お互いに声を掛け合い、困っているブースの手伝いをし協力することで、効率良く活動に取り組むことができた③。

下線①では、見通しをもった事前準備の重要性に関する学びが多く挙げられている。材料や道具の不足、試作段階での想定不足といった経験を通して、当日の活動を円滑に進めるためには、失敗やトラブルを想定した計画や準備が必要であることに学生自身が気づいている様子が窺える。

下線②では、子どもの身体的特徴を踏まえた教材研

究や、テーマに沿った素材や装飾の選択に関する記述である。当初、楽器の大きさや使いやすさが子どもに即していなかったことへの助言を受けた振り返りから、子どもの目線に立って材料や構成を考える必要性への気づきを示されている。また、『100かいだてのいえ』の世界観を意識した素材選びや装飾に目を向け、環境構成の大切さを学んでいたことが窺える。

下線③では、グループ内外での協力や情報共有、保護者対応に関する気づきも挙げられており、楽器作りの活動が個人作業ではなく、他者との協働によって成り立つ実践であることを学生が体験的に学んだことが窺える。

6-2 衣装製作コーナー

衣装コーナーを担当する学生の中から代表して5名を取り上げ、まとめたものが表5である。

表5 衣装コーナー担当学生の振り返り

<p>学生5：あらかじめ洋服の形やカチューシャの形を作っておきましたがカチューシャのサイズが小さく…様々なサイズを用意しどの子どもにも合うようにするための事前準備がもっと必要②である……効率よく進めることができましたが、自分以外の人たちがどのような事を行っていてどこまで進んでいるのかを理解できていませんでした①</p>
<p>学生6：やることリストを作成したり飾りの貼り方や場所が共有できていなかったのでもっと話して決めて共有すべきだった①……衣装の頭を出す部分が小さかったりかぶり物が小さくて入らないことがありました②……保育・幼児教育の中では、一人ではなく周りの人達と協力することでスムーズにできるだけではなく、速くできることによって他のことをすることができる①……</p>
<p>学生7：チーム内での話し合いやそれらに対する協力について学んだ…作業を行いつつ、「何がまだ終わっていないのか」「優先順位」などチーム内でコミュニケーションを取りながら行うことはお互いが進行状況を把握することで次の行動にも移りやすい①……被り物はある程度完成した状態だったため調節ができなく子ども達が選んだものが頭に入らず別のものを選んでもらうことも……輪ゴムの片方だけ付け調節を行えるようにしていれば自分の好きな恰好ができたのではないかと②……</p>
<p>学生8：子どもが実際に洋服をデコレーションしている様子を見て、子ども一人ひとり全く違ったデコレーションをするのだと感じた……子どもによって洋服に描きたいものが違うということが分かった③……保育者はできる限り幅広く表現できるように事前準備しておくことが重要だと再認識……保育者がきちんと教材研究をし、子どもがなるべく自由に表現できるように事前準備しておく②と、活動も活発になり、子どもにとって有意義な時間になる……</p>
<p>学生9：製作コーナーで……好きな絵を描くことを楽しむ中で子どもの一人一人異なる表現を見ることができた……私たち大人が子どもの新たな発見に繋がるような工夫をし、表現することからも表現力を身につけることに繋がる……表現することを楽しむ子どもの姿を認め、言葉をかけることで子どもの表現をすることへの意欲を高め、表現することの楽しさを共有していきたい③……</p>

下線①では協働体制についての内容が挙げられており、事前準備必須の衣装製作チームにとって役割分担をして効率的に準備にあたることは必要であるものの、その過程で経過報告をすることで互いに状況把握をするとともに必要に応じて手助けをすることができることの重要性を学んだことが窺えた。

下線②は事前準備した衣装のサイズに対する課題についての記述である。が前述した通り衣装の首回りやカチューシャのサイズが子どもに即さない場合があったことが挙げられ、子どもが身に付けるものは臨機に

対応できる作りをする必要性や事前の教材研究の必要性への気づきが窺える。

下線③は子どもの自由な表現を認めることの重要性についての記述である。子どもの発想から表現されたものが個々に異なり、保育者はそうした子どもの自由な表現を引き出すことのできるような工夫や配慮が求められることを学んだことが分かる。その他、今回のようなイベントでは子どもだけでなく保護者も楽しめるようにする必要性も挙がっていた。

6-3 参加体験コーナーの学生の学び

表6 参加体験コーナー担当学生の振り返り

<p>学生10：グループの中でその日のノルマを決めて活動し、授業終わりには、できたところを報告し合い、次の授業のノルマを全体で決め、常に声を掛け合うことを意識して活動した。そうすることで、効率的に進めることができ計画を立てリスト化することの大切さを学んだ。</p>
<p>学生11：私たちがなりに想像していたものと近いものを作ることができたのは、意見がぶつかりながらもアイデアを沢山出し合ったこと、ない時間を作ったこと、妥協したことが理由であると思う。同じものを複数人で作るということは1人でも意見が違えば進まなくなってしまう。そのため、どうすれば全員が納得するものに行き着くのか、話し合いが大切だと感じた。</p>
<p>学生12：製作は順調だったが、他のグループとの連携がとれていなく、どこが自分たちのグループが担当するのか分からなくなっていた。……自分たちのグループだけでなく、他のグループとも情報共有を図ることが大切だと知った。保育の現場では、他のクラスの先生たちとも子どもの情報共有を行っていかないといけない。今回の情報共有の出来なさを、保育の現場では出来るようになっていきたい。</p>

学生13：糸を張る位置をグループの人と確認しながらすることで、自分は「この高さなら子どもも通ることができるだろう」と思っても実際、子どもにとっては他の糸に集中して糸に引っかかってしまうこともあるかもしれないのでそのようなことを予想しながら作ることが大切だと感じました。……保育・幼児教育の中では、子どもの安全に意識することはとても大切となってくるので、「これは大丈夫だろう」と自分だけの考えにならず、他の保育者と子どもにとっての安全を確認しながら教材を作るようにしたいと考えました。

学生14：壁の高さを決める過程で、子どもたちの身長や年齢に合わせた設計をしっかりと考えることの重要性も学びました。……年齢差による難易度の違いを意識し、個々の子どもが無理なく、または適度に挑戦できる環境を整えることができました。このような環境を作り出すことが、保育者としての役割の一つだと感じました。

学生15：子どもたちの姿を見てみると、楽しむことだけでなく、自分たちで一生懸命体を使ったり頭で考えたりしてゴールを目指す姿から、一つのものではなく複数の動きや環境を作ることで子どもをそれにこたえようと活動も幅も広げていることがわかった。保育。幼児教育の中でも……子どもの主体性を考えながら意欲を尊重し、同じ活動でも違う活動でも毎日新しい経験と思いをもって活動に取り組めるようにしていきたいと考えた。

学生16：表現活動がもたらす再現性や活動の幅の広さについて学んだ。これまで絵本を見て楽しんでいた世界が現実にあることで、子どもは絵本とは違った楽しさやおもしろさを味わうことができる。そのような経験が子どもの好奇心を掻き立て、次は自分たちが「つくってみたい」「やってみよう」と思うのではないかと考える。

参加体験コーナーを担当する学生の中から代表して6名を取り上げ、まとめたものが表6である。参加体験コーナー学生の記事から、様々な学びのあったことがうかがえる。活動する中で、計画的な行動の重要性(学生10)、協働的な姿勢の大切さ(学生11)、情報交換の必要性(学生12)があがった。また、製作物の安全性(学生13)、環境の重要性(学生14)、表現活動による子どもの成長(学生15)は、実際に材料とかわ

りながら、また、参加した子どもの姿から、製作物の適不適を確認している。さらに、製作コーナー全体をまとめた学生(学生16)からは、活動全体について、的確にまとめた記述があった。上記の記述以外に、活動を通した達成感、限られた時間と予算の中で目的を達成することの困難さ、来場者への対応から学んだことについての記述もあった。

表7 コンサート担当学生の音楽表現に関する振り返り

学生17：この活動で『年齢に合わせた活動をする』が重要な点だと一番感じたのは大型絵本の時です。大型絵本チームは、問を大切にしていたので少し長めでしたが、絵本と一緒に音楽も楽しめる機会はあまりないと思うので、大きい子どもは前のめりになるほど、見入っていました③。……小さい子どもは途中から動き回ったり、外が気になっていたりしていました。……年齢に合わせた活動の大切さを感じました④。

学生18：コンサートの準備は1つの流れを考えながらコンサートをする学生も楽しくできるようにやりたい企画を考えながら進めました①。

学生19：途中で音楽を含みながらの読み聞かせで、音楽を演奏する学生と息を合わせながら読むことがとても難しく、練習を何回も行うことで息があっていきいと感じました①。「にじのむこうに」の演目では踊っている学生を見る子どもがほとんどだと思いますが、演奏している私たちが笑顔で楽しい雰囲気を作ることで、子どもはより楽しめることがわかりました②。

学生20：コンサートのメンバーで、どのようなプログラムにすると子どもが楽しむことができるのか、笑顔になることができるのかを考え、コンサートで行う曲目などを考えた①。主に、絵本の読み聞かせの場面では、より絵本に登場する生き物に近づくため、色々な楽器で音を試して効果音や音楽を考えることで子どもが絵本の世界に入り込んで絵本を見ることができると学んだ。……子どもが普段使わない楽器や音を使用することで、少しでも音楽に興味を持つことができると思った。ただ絵本を読むのではなく、効果音や音楽を加えることで年齢が低い子どもでも楽しむことができ、絵本に親しみを持つことができると感じた③。……全員での合奏やダンスの際には、笑顔で元気よく楽しそうにすることに気を付けて行った。そうすることで、見ている子どもたちに楽しさが伝わり、会場全体で心一つにすることができると学んだ②。

学生21：当日は、年少から年長の子どもまでいて、発達段階の違いによって絵本の読み聞かせや演奏のときの様子が違い、年齢や発達段階に適した活動をする必要があることもわかりました④。読み聞かせでは絵本が長く、途中から……喋ったり動き出したりする子どもが見られましたが、読み聞かせの間の場面に合った音を楽器で鳴らすことで、再び子どもが注目したり興味をわいたりするきっかけになっていました③。……そして、読み聞かせの間に楽器を使って音を鳴らしたり、へびの迷路の中で道によって仕掛けや音、色を変えることで、子どもが長く楽しむことができる工夫や、色々な感情、刺激になるような工夫をしていきたい③です。……私たちが楽しんで活動することで、子どもも楽しく活動できるきっかけになっていた②。

学生22：当日は2歳児から年長までの子どもがいて集中力も様々であったため、巨大絵本の読み聞かせでは途中から飽きてしまう子どもの様子も見られた④。しかし、色々な楽器で効果音を入れたりBGMを入れたりしたことによって、子どもの興味を引き付けることができていた③。

学生23：絵本の読み聞かせの場面では、登場する生き物により近づけるため様々な楽器で音を試し、効果音や音楽を考えることで子どもが絵本の世界に入り込んで絵本を楽しく見ることができると学んだ③。絵本の読み聞かせをする際は、子ども達の表情や反応を見ながら音楽に合わせてページをめくることが意識して行った②。

7. コンサート担当学生の学び（音楽表現）

コンサートを担当した学生の中から、音楽表現に関する振り返りを代表して6名分取り上げ、表7に示した。

下線①では、活動当日に向けてグループ内で協力しながらプログラムや構成を考え、準備・計画段階においても協同的に進められている活動であることが、学生の記述から示されている。また、学生19の記述に見られるように、演奏と読み聞かせのタイミングを合わせることの難しさを感じ、練習を重ねることで次第に改善していった経験を通して、個々の役割を果たすだけでなく、全体の流れや他者の表現を意識して関わることの重要性に気づいていった様子も窺えた。

下線②では、音楽活動において演奏する側の姿勢や雰囲気、子どもの反応や活動への参加意欲に影響を与えることへの気づきが挙げられている。踊っている学生だけでなく、楽器を演奏している学生自身も笑顔で関わることで、音楽の楽しさが子どもに伝わりやすくなることに言及した記述も見られ、学生が音楽的表現を演奏技術にとどまらず、演奏者の在り方を含めた表現活動として捉え始めている様子が窺える。

下線③では、大型絵本の読み聞かせに音楽や効果音を加えることで、子どもが物語世界に没入したり、再び興味を向けたりする様子に関する内容が挙げられている。学生の記述から、音や音楽が絵本の世界観をより深く味わわせ、子どもの関心を高める働きもっていることが窺える。

下線④では、子どもの年齢や発達段階によって、絵本の読み聞かせや音楽活動の受け止め方に違いがあることを学生が実感している様子が示されている。ま

た、そうした子どもの姿を踏まえ、活動内容や時間、音の取り入れ方を工夫する必要性を捉えている様子が窺える。

7-1 コンサート担当学生の学び（言語・身体的表現）

コンサートを担当する学生の中から代表して7名を取り上げ、まとめたものが表8である。

下線①では前に立つ大人が楽しそうな雰囲気を表現することで子どもの期待感や充実感を引き出すことについて記述されており、保育において重視される「楽しさの共有」についての気づきが印象的である。筆者らがコンサートの練習段階で「笑顔を意識して」と繰り返し伝えていた意味と重要性が本番の子どもとの時間を通して実感できたのだろう。なお、同様の記述が12名中11名に見られている。

下線②は子どもの発達状況に即した表現についての記述である。子どもの発達過程には口の動きや耳から脳へと入る情報の速さ、身体の動きなど概ねの順序・道筋があり、学生の気づきの通り保育者はそうした年齢や発達状況に即した見通しを持つことが必要である。ダンス・歌・クイズ、どのような表現活動であっても子どもが理解して十分に楽しめる、あるいは最近接領域に配慮された内容の検討が必要であり、12名中7名の学生にその記述が見られたことから、一定の学生が自身の気づきとしてこの学びを得たことが窺える。その他、保育者同士の協働体制から互いの保育について指摘することの重要性について気づく学生も見られた。

表8 コンサート担当学生の音楽表現に関する振り返り

学生24：ダンスは、始めに参考にしていただいていた動画が、「子どもには難しい動きが多い」という先生の助言を受けて、「できるだけ簡単な動きかつ様々な動きを取り入れられるもの」と、ダンス担当だった人でテーマを決めて動きを考えました。……ダンス担当の4人で左右の動きや、少し違う動きがあったので全員で合わせて、子どもが混乱しないように練習をしました。ダンスだけではなく、声を出すところも考えて、子どもも生徒も楽しめるように準備をしました。②

学生25：読み聞かせの練習の中で私は絵本を読むときのスピードが速いことや子どもの様子が見れていないこと、文と文の間に間がないことが分かりました②……踊っている学生を見る子どもがほとんどだと思いますが、演奏している私たちも笑顔で楽しい雰囲気を作ることで子どもはより楽しめる①ことが分かりました……

学生26：「むしむしフェスティバル」のダンスを……アレンジして考える際……子どもたちが当日初めて踊るダンスを私たちがどのように表現して分かりやすく伝えるかなど子どもたち目線になって考えることで子どもたちに寄り添うことのできる保育へと繋がるのではないかと②……

学生27：私たちが楽しんで活動することで、子どもも楽しく活動できるきっかけになっていたのも、保育者になっても子どもと一緒に楽しむことを忘れず、一番大切に活動していきたい①……

学生28：本番のビデオを見た時、自分で思っているより、ダンスの振りが小さかったことと、子どもたちに話すときに真ん中に座っている子どもの方ばかり見て端の方にいた子どものことを全然見ていなかったことが気になりました。子どもは話している人のことをとでも見ていてくれるので、子ども全員と目が合うくらい後ろまでしっかり見渡しながらかつ話すようにしよう②……

学生29：絵本の読み聞かせをする際は、子ども達の表情や反応を見ながら音楽に合わせてページをめくことや、読む速さや登場人物のセリフの場面のイントネーションを意識して行った。そうすることで何度も練習を重ねていくうちに場面のセリフを覚えることができ本番では子ども達の表情や反応を多く見ることができた。②……

学生30：ダンスの場面では子どもたちも一緒にダンスをすることによって、協調性や他者を思いやって一緒に楽しむ力も育まれる①……

8. 総合考察

8-1 授業構成

授業構成の可否について述べる。以前より課題としていた活動期間については、2年前期の「表現技術Ⅲ」を「総合表現」の準備に充てることで、解消できたと考えられる。実質、2カ月の活動期間で、製作、発表、振り返りまで実施できた。発表を伴う授業では、発表日を照準に計画を立て製作を実行するのが常である。不測の事態に備えて、多少、余裕のある日程を考えてはいるものの、実施してみると想定外の出来事は起きてしまう。「表現技術Ⅲ」で、あらかじめの準備を終えたことで、学生は余裕をもって活動に臨むことができた。

また、発表そのものにエネルギーを費やしがちであるが、活動後の振り返りも重要である。お互いの発表に参加し、また、当日の活動の動画を鑑賞する(第14回)ことで、学生自身の客観的な様子を確認することができた。さらに、各自、各パートと各コーナー、全体での振り返りをする(第15回)ことで、活動の成否を確かめることもでき、学びは深まったと考える。授業構成は適切であった。

8-2 テーマ

絵本『100かいだてのいえ』をテーマとしたことの可否について述べる。絵本のテーマは「数」であるが、学生の構想したコーナーに「数」の要素はなかった。乳児はもとより幼児にとって数の概念は曖昧であり、いわい自身、小学生の娘の姿から着想した絵本である。それよりも、物語に登場する様々な動物の特徴から、各コーナーで展開する遊びや演目を構想し、製作し、発表した。不特定多数、年齢も一定ではない子

どもを対象にした遊びや演目の内容は限られる。内容によっては、乳児は喜ぶが幼児には物足りない。逆に、幼児には面白いが乳児は楽しめないことが起こりうる。そのような状況を踏まえて、学生は大学での様々な学びから、遊びや演目を考えることができた。活動中での取り組み姿勢や工夫したことは、前述の通りである。絵本そのもののテーマからは外れたものの、多彩な活動へと結びつき、絵本『100かいだてのいえ』を選択したのは適切であった。

8-3 学生の取り組み

学生の取り組みの可否について述べる。参加体験、製作、コンサートの3つのコーナーに分かれ、学生は熱心に活動に取り組んだ。学生の振り返りの記述からも明らかである。各コーナーの中でさらに各パートに分かれたことで、一人ひとりの役割と責任が明確になったことも一因であろう。しかし、各コーナー、各パートに分かれる段階でグループのメンバー構成に学生は腐心していたようである。同じ学生である以上、課題を達成するためには誰とでも協力して臨むべきである。ところが実情としてはそうはいかない。気心が知れ一緒に活動しやすい学生と、そうではない学生がいる。また、コンサート・コーナーでは、楽器の演奏技術をもっていたり、人前で演じたりすることに慣れている学生をメンバーとして含める必要がある。限られた人数から、各コーナーに適切な学生を振り分けることができたため、概ね円滑な活動につながった。

「総合表現」は、表現系科目の集大成である。学生はこれまでの学びの中で得た知識を、技能を、経験をもとに、協力しながら活動に取り組むことができたことを評価したい。

8-4 教員の反省、残された課題

前述のように、2024年度の「総合表現」の取り組みは充実していたと考える。それでも、反省点、課題はある。教員の反省としては、どこまで指導をするか、各コーナーによって差が生まれたことがある。「学生を信じて…」といえども、学生間では解決できない問題には教員が介入をせざるを得ない。発表日までの時間が少なければ、教員主導の活動となる事態も生まれる。各コーナーの特徴にもよるが、学生主体の活動とするためには、極力、教員の指導・介入を控えることが必要ではないだろうか。

また、絵本を題材としたことで、活動内容、演目に広がり生まれた一方、絵本の視覚的イメージの取り入れ方に課題は残った。絵本が視覚表現メディアである以上、絵柄の魅力は絵本そのものの魅力でもある。しかし、絵をそのまま用いることは著作権上の問題となりうる。学内での発表であるため、今回の活動に関しては許容の範囲と考えるが、絵柄にとらわれすぎない活動とするための具体的な方策を、教員は考える必要がある。

8-5 謝辞等

発表を伴う学習活動では観客・参加者の動員が求められる。多忙な中、ご協力いただいた地域の皆様、本学科教職員の皆様にこの場を借りて感謝を申し上げます。

脚注

- 注1 作詞・作曲かしわ哲の楽曲。NHKのTV番組「おかあさんといっしょ」で放映され、子どもに人気となっている。
- 注2 作詞・新沢としひこ、作曲・中川ひろたかの楽曲。
- 注3 作詞・作曲坂田修の楽曲。
- 注4 注2同様、作詞・新沢としひこ、作曲・中川ひろたかの楽曲。

参考文献・引用文献

- 1) 岩井俊雄・吉田衣里 編著『どっちがどっち？ いわいとしお×岩井俊雄—100かいだてのいえとメディアアートの世界』(2023) 茨城県近代美術館 197-201
- 2) 前掲1) 013, 070, 074, 078, 170
- 3) いわいとしお『『100かいだてのいえ』(2008) 偕成社
- 4) 前掲1) 027-028
- 5) 和田直人『絵を読み解く 絵本入門』(2018) 藤本朝巳・生田美秋 編著 ミネルヴァ書房 282-287
- 6) 前掲1) 029-031, 033-037, 046-049, 052-054, 119